

1 研究主題

一人一人の自立を促す指導・援助の在り方に関する研究

< 内容の要約 >

本研究は、多様化する不登校への効果的な指導・援助の在り方を求めることを目標に設定し、平成2年度から10年度まで本教育センターでかかわった事例を分析し、多様化する不登校の態様を明らかにするとともに、事例を通して効果的な指導・援助の在り方を探った。その中で、信頼関係の回復、対人関係の広がりが見られるにつれ、不登校の状態が改善していくことが認められた。

< キーワード >

(1)不登校の多様化 (2)信頼関係の回復 (3)対人関係の広がり

2 研究の目標

事例を通して不登校の態様及び援助の過程を検討し、多様化する不登校への有効な指導・援助の在り方を探る。

3 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

多様化する不登校の子ども像を調査する。

事例を通して不登校への有効な指導・援助の在り方を探る。

(2) 研究の方法

1年次（平成10年度）

平成2～10年度までの本教育センターにおける来所相談事例について調査項目を設定し、多様化する不登校の子ども像を調査する。

2年次（平成11年度）

個々の事例を分析することで、不登校の背景及び指導の過程を探る。

個々の事例を通して、有効な指導・援助の在り方を探る。

4 研究の実際

(1) 1年次

ア 調査

不登校の子ども像をつかむため、本教育センターで平成2～10年度にかかわった460事例（表1）のうち、不登校を主訴とするもので、来所が3回以上継続した209事例について調査を実施した。

調査方法は、あらかじめ不登校の事例を理解するために必要と思われる29項目（表2）の調査項目を作成し、事例の面接記録を手掛かりに記述内容を読み取って、それぞれの調査項目について記入していく方法をとった。

表1 年度別来所相談件数 ()内の数字は調査対象件数

	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8	平9	平10	計 (調査対象件数)
小学校	12(5)	6(3)	6(2)	9(4)	9(5)	8(4)	9(5)	10(4)	7(4)	76件(36件)
中学校	27(17)	31(14)	25(6)	38(17)	38(18)	33(13)	29(11)	30(16)	14(10)	265件(122件)
高等学校	23(12)	23(8)	20(7)	12(2)	9(4)	7(3)	8(5)	9(6)	8(4)	119件(51件)
計	62(34)	60(25)	51(15)	59(23)	56(27)	48(20)	46(21)	49(26)	29(18)	460件(209件)

表2 調査項目

	No	項目	No	項目	No	項目
本人	1	本人の来所	14	父親の養育態度 (保護的)(支配的)	18	不登校のきっかけ
	2	閉じこもり		(拒否的)(服従的)	19	友人関係 (不登校前)(不登校後)
	3	身体症状	15	母親の養育態度 (保護的)(支配的)	20	学力
	4	昼夜逆転		(拒否的)(服従的)	21	関心・興味
	5	外出(休日)(平日)	16	親の不登校に対する意識	22	病歴
	6	学校へのこだわり	17	登校刺激(親)	23	転校歴
	7	学校への出入り		登校刺激(学校)	24	家庭環境(影響の強い要因)
	8	室内遊び			25	不登校の兄弟姉妹の有無
	9	室外遊び			26	学校の対応
	10	学習			27	担当の親に対する印象
	11	家族との食事			28	他機関での相談
	12	甘え(退行)			29	その他(特徴的なこと)
	13	手伝い				

【記入について】
 記入については、No. 1～17までは、その状態が「ある」「なし」で記入し、No.18～29までは文章で記述した。
 また、不登校状態が個個で異なることから、初回面接から3回までに得られる情報を収集した。

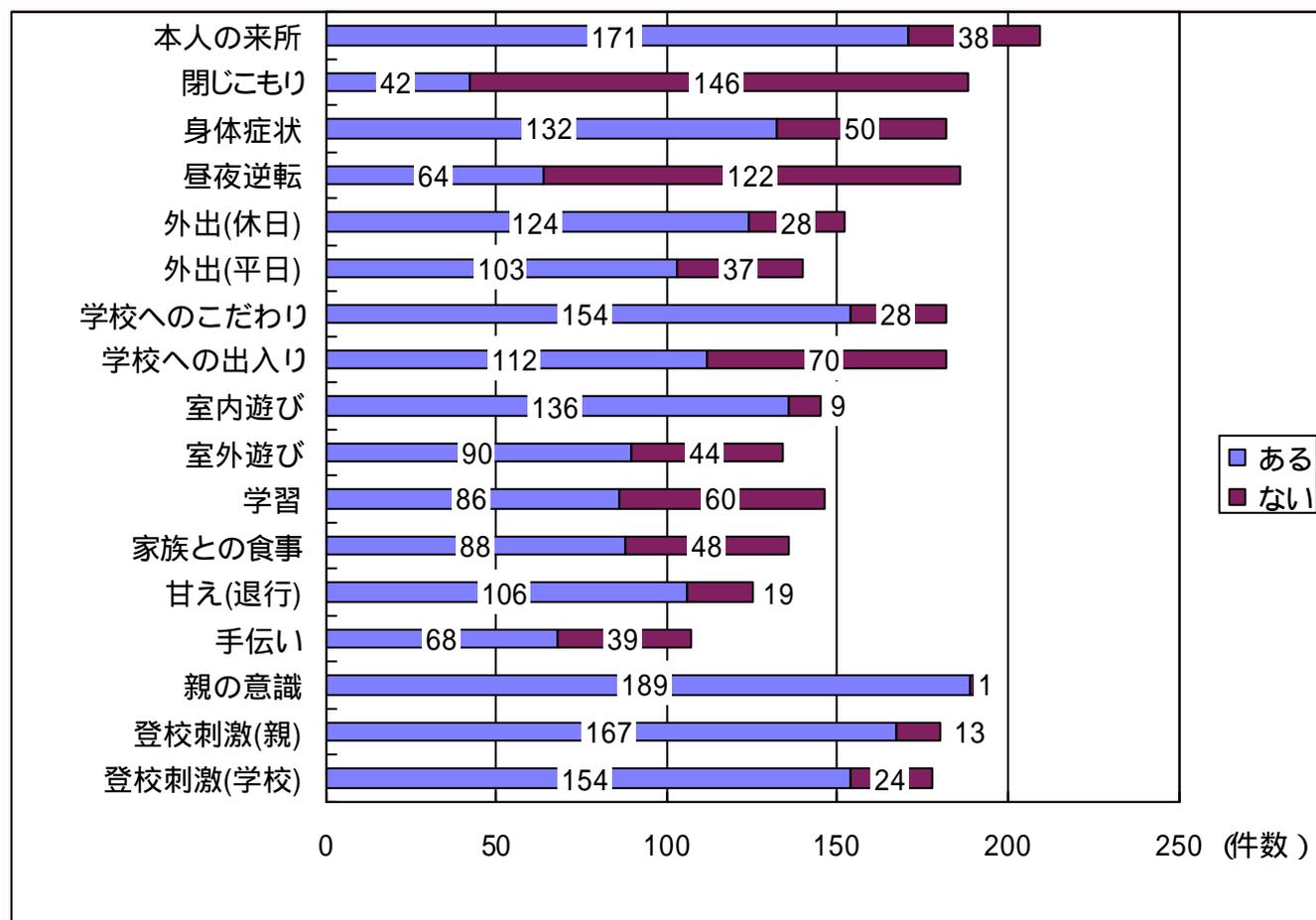


図1 不登校状態及び子ども像の把握のための調査結果

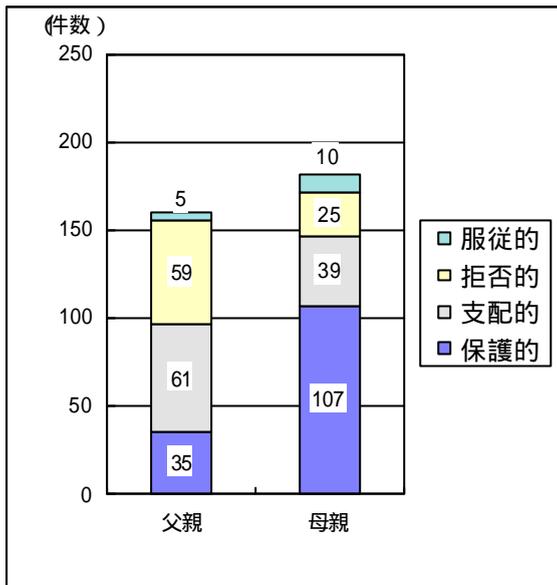


図2 保護者の養育態度

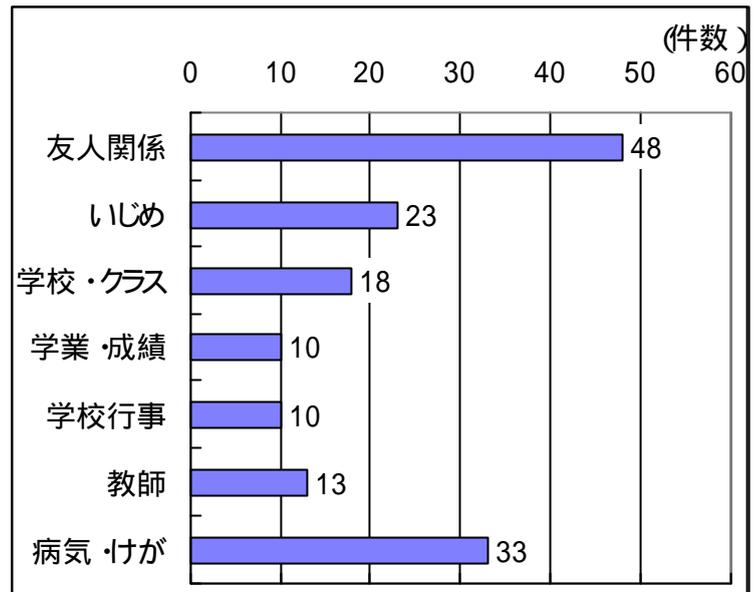


図3 不登校のきっかけ

イ 考察

すべての事例において、初回面接より3回までの情報に限っているため、児童生徒の状態などに差異があり、一概に比較することはできないが、今回の調査から、以下のような傾向がうかがわれた。

- ・ 学校へのこだわり(No. 6)が強い。(図1)
- ・ 学校への出入り(No. 7)ができていない事例の割合が半数を超えている。(図1)
- ・ 外出(No. 9)ができる事例の割合が高く、さらに、学習(No.10)に取り組む事例も多く見られる。(図1)
- ・ 不登校状態の中で、特定の友人との遊びを継続している(No.19)。
- ・ 不登校のきっかけとして、いじめを受けたり集団になじめないなど、学校における人間関係を要因とする事例の割合が最も多い。(図3)

また、保護者については次のようなイメージでとらえることができる。

- ・ 父親は「支配的」か「拒否的」(No.14)、母親は「保護的」(No.15)なかわり方が特徴的である。(図2)
- ・ 学校の対応に大きな期待を寄せている保護者が多く見られる(No.26)。
- ・ 不登校への不安や焦りから、複数の機関へ相談している事例も多い(No.28)。

本教育センターが作成した「登校拒否のパターンと各時期の援助の基本」(「子どもを生かす教育相談」昭和60年)において、不登校の状態を【心身症の時期】【反抗・暴力の時期】【怠惰・閉じこもりの時期】【登校準備の時期】【立ち直りの時期】とパターン化し、そのうえで各時期におけるかかわり方や留意点を示している。このことは、多くの不登校事例や、児童生徒を理解するための基本となるものであるが、今回の調査において浮かび上がってきた子ども像から、不登校の状態はパターン化しにくくなっており、かかわり方も、単純にはマニュアル化できなくなってきたと言える。さらに、保護者の学校に寄せる期待の大きさから、今後ますます、不登校児童生徒一人一人に添った対応が求められるようになっていけると考えられる。

1年次の調査で「学校へのこだわりが強く、登校できないが心理的には閉じこもることが少なく、外出や遊び、学習に取り組む」という従来とは違ったタイプの子どもの像が浮かび上がってきた。

このようなことが長期化する要因になっているかどうかについては今回の調査では明らかにするこ

とはできなかったが、このような態様はいわゆる“葛藤の少ない不登校”として多くの報告がなされている。

(2) 2年次

ア 調査

パターン化、マニュアル化できにくくなってきた不登校事例への有効な指導・援助の在り方を求めるため、個々の事例について分析・検討し考察を加えることが必要になってきた。そこで、次の視点で事例を抽出し、事例から有効な指導・援助の在り方を探ることとした。

視点1 平成9～10年度に本研究委員が直接かかわった事例。

視点2 かかわりの中で事例の変容が見られる事例。

視点3 本人や家族について理解がなされたうえで、対応の工夫が見られる事例。

また、それぞれの事例については、次の点を留意し考察を加えた。

不登校像を明らかにする…「不登校の背景にあると思われる要因は何か」

有効な援助の在り方を明らかにする…「不登校の要因と思われることに対してどのような援助がなされたか」「その結果どのような変容が見られたか」

イ 事例について

以上の視点を基に次ページから載せる9事例を取り上げ分析を進めた。また、9事例における主な要因と対応のポイントと考えられることを要約し表4に示した。

表4 不登校の主な要因と有効な対応

事例	不登校の背景またはきっかけとなったと思われる主な要因	有効な対応のポイント
1 (小3)	・いじめられ体験による友達不信	・担任の積極的なかかわりと登校刺激
2 (小4)	・母子分離不安 ・いじめがきっかけで友達関係がつかれない	・養護教諭のコンサルテーション ^(注1)
3 (小5)	・幼児期から人見知り(特に男性)が強い ・初めての男性担任への対人緊張	・校内研修会による児童理解と対応の確認 ・校内での居場所づくり ・他機関との連携
4 (中1)	・自立心や耐性の欠如 ・学力不振、体型コンプレックスから生じた自尊心の低下	・子どもの特性を生かした居場所づくり ・相談機関の活用 ・母親のサポート
5 (中2)	・体型コンプレックスから周囲の目を気にし孤立感を抱く	・登校にこだわる両親への担任による粘り強いかわり
6 (中2)	・学校、担任に対して、本人及び母親が抱く不信感	・担任の粘り強いかわりによる担任と親子との人間関係の改善
7 (中3)	・転校により生じた孤立感 ・自己肯定感の低下 ・母親の子育て不安	・スクールカウンセラーと担任との連携による本人と母親の心の安定を図る援助
8 (中3)	・いじめによる傷つき体験 ・学校や父親に対する不満や不信感	・本人のペースを尊重した学校と適応教室のかかわり ・本人の状態に応じた担任の継続的にかかわり
9 (高1)	・仲間はずれによる対人不信	・担任を中心とした友人関係の改善 ・クラスの受け入れ態勢づくり ・担任と保護者との連携と相談機関の活用

(注1) 本事例の場合、担任だけが対象となる子どもにかかわるのではなく、母親、級友、他の職員などそれぞれが子どもに対応できるよう、養護教諭が中心になって、学校全体を支えていく方法。

事例 1 積極的な登校刺激で登校につなげた事例 A男(小学校3年生)

事例の経過

保育園でA男は活動的でリーダー的な存在であったが、自己中心的な言動や、他者への配慮を欠く行動が多かった。そのためか集団から排斥されるようになり、他の強い存在の子どもからもたたかれる、蹴られるなどのいじめを受けるようになった。いじめは小学校1年生ごろまで続いた。

3年生の4月、発熱のため学校を休みがちになった。特に月曜日の欠席が多く、休んだ日は家でテレビやマンガ本を見て過ごした。このころ担任はほとんど毎日のように家庭訪問をし、A男と話をしたり遊んだりしながらのかかわりをもった。また、朝迎えに行ったりクラスの友達に誘ってもらったりするなど、登校を促しながらA男の様子を見守った。

6月から全く登校しなくなった。担任は家庭訪問を続けるが、話しかけても返事をしないことが多かった。担任や友達の訪問に対して特に嫌がる様子のないA男を見て、担任は学校とのつながりを継続することの必要性を感じ、校長の指導の下、保護者とも話し合いながら、これまでのようにかかわりを続けていくことにした。

7月、担任は週2回、放課後に数人の男の子と一緒に家庭訪問をし、庭でミニサッカーをするようになる。また、休日を利用して魚釣りに行ったことから、A男は担任の訪問を更に楽しみにするようになる。しかし、一人の時はダラーッとした感じでマンガやテレビを見るが多かった。

8月には夏休みを利用してクラスで「星を見る会」を計画した。会の準備を前日の夜に設定し、仲の良い友達と一緒に来てもらうことで、A男は夜の教室や職員室に入ることができ、準備に動き回った。さらに「夏休みの一番の楽しみは、友達や先生と釣りに行くこと」と言うほど、釣りを楽しみにするようになった。

2学期の始業式の朝、担任が迎えに行くが登校はできなかった。その後、担任は毎朝A男の顔を見るために訪問するとともに、仲の良い友達に誘ってもらったり放課後遊びに行ってもらったりした。10月には休日を利用して親類の家に行き釣り大会に参加、釣りを通しての動きが更に広がった。担任は運動会に誘う、朝迎えに行く、昼休みに友達に家に行ってもらおうなどの働きかけを続けた。

冬休みに入り、担任が友達とミニサッカーをしようと学校に誘った。3学期の始業式への参加についても話題にするが、これにはA男は力なく首を横に振った。

3学期の始業式の日、担任が誘いに行くが登校できなかった。その後、週2回の放課後のミニサッカーを計画した。このことを職員連絡会で報告し、担任以外の教師の参加も呼びかけた。A男のサッカーの技能も向上して、とても楽しそうだった。また、学校でもクラスの行事として「ミニサッカー大会」を企画、A男は当日午後から登校し、大会を通して久しぶりにクラスのみなどと交流することができた。

3月には母親の送迎により、午後からの登校が可能になる。さらに、友達に迎えに来てもらうことで週2～3回、朝からの登校ができるようになった。

考 察

いじめによる友達不信から不登校になったが、担任の積極的な登校刺激の中で、信頼関係を回復し、登校につながった事例である。

ここでは担任がクラスの友達を中心として、家での遊び、地域での遊び、夜の学校への誘い、冬休み中の学校への誘い、放課後の学校への誘いと、活動の場を積極的に広げていった。このような、担任のリーダーシップの下に、A男の対人関係の回復の場が提供され、ごく一部の友達から他の教師、さらに、クラス全体へと関係づくりの場が広がっていった。

また友達との交流は、いじめで傷ついたA男の心の傷を癒し、友達との信頼関係を回復していくとともに、自己中心的言動の多かったA男に、対人関係のルールを育てていくことにつながったと考えられる。

事例2 保健室を心の居場所として教室復帰を援助した事例 A子(小学校4年生)

事例の経過

小学校2年生の5月ごろよりA子は腹痛や吐き気を訴え休みがちになる。5月の運動会には何とか参加したがB子からのいじわるがきっかけとなり、全く登校できなくなる。家庭でも不安を訴え、夜驚^(注2)が始めるようになって、両親の不安も大きくなった。学校ではA子や両親の不安を理解しながらクラスの子もたちに対応するとともに、A子の状況を見て保健室登校を働きかけた。学校では母親と離れることのできないA子のために、母親も一緒に保健室登校をし、保健室での担任とのかかわりや放課後の教室での担任の個別学習などを通して、2年生終了時には時々教室へ戻れるようになった。

3年生になって、B子とは違うクラスになり、担任も替わった。担任はA子を中心に据えた学級経営に配慮したが、A子は教室に入れず母子での保健室登校が続いた。そのため、保健室がA子にとって、友達とのかかわりの場、担任とのかかわりの場、母親とのかかわりの場となるように配慮した。その結果、2学期になりランドセルは保健室に置いたまま授業に参加することができてきた。また母親は、保健室で他の子どもたちとも触れ合いながら、子どもへの接し方を学び、少しずつA子への対応にもゆとりが見られるようになってきた。

4年生になり担任が替わった。一か月間は朝から教室に入ることができたが、徐々に教室へ入れなくなった。その後好きな教科には参加できるようになったが、級友がそれをA子のわがままと受け止めてしまい、A子への不満を出すようになった。そのためA子は級友への不信感を強め、両親もA子の変化に不安を訴えるようになって、担任は対応に苦慮した。そこで学校では、担任を支える体制をつくり、クラスの安定を図るとともに、養護教諭が母親とのかかわりをもって不安に添えていくことにした。そのことによって、徐々に母親も「友達との人間関係がうちの子の課題なんですね」とゆとりをもって言えるように変わってきた。このころになると、A子が不安や不信感を訴えても、母親がA子の気持ちをじっくり聴くことができるようになり、A子も安定して友達とかかわれるようになるなど変化が見られた。休み時間以外でも教室で過ごす時間が増えるよう働きかけた。また、ランドセルは保健室に置いたまま、学習道具だけを持って教室へ行けるようになった。その後、運動会の応援団やリレーの選手に立候補するなど自分で決めた目標に向かって行動できるようになった。

考 察

友達のいじめがきっかけで、登校できなくなったが、保健室が友達や担任、母親とのかかわりの場となることを通して、安定を取り戻し、集団に入れるようになった事例である。

母子で保健室登校が始まり、A子の好きな絵描きや母親の得意な折り紙を取り入れるなど、保健室が親子の安心できる居場所となるよう配慮した。保健室を中心に過ごす中で、給食の際、級友や担任に入ってもらい、和やかな語らいの場としたり、抵抗の強い教科は無理して押し出すことを避け、保健室で個別指導をすることによって、A子にできた喜びを感じさせたりした。

このことにより、保健室での友達や担任・他の職員との触れ合いが増えていき、信頼感の回復につながった。また、A子の不安が強く母親から離れることができないときは、母親との遊びによるかかわりを勧めた。そのことを通して母親は、A子が嫉妬したり、すねたり、泣きわめいたりすることを母親への一つ意思表示と受け止めることができるようになって不安が軽減し、A子への対応にゆとりが感じられるようになった。

結果的に保健室が、A子と友達・担任との信頼関係の回復の場、また母子関係改善の場として提供されたと言える。

(注2) 深い睡眠期に大きな叫び声をあげて起き上がり、目をすえ、走り回るなど強い不安を訴える。緊張・興奮・不安などの情緒的な原因が考えられる。

事例3 校内での居場所づくりで登校できるようになった事例 A子(小学校5年生)

事例の経過

A子は幼児期から人見知り激しく特に男性には強い抵抗を示した。小学校に入学して意思表示がうまくできないために友達との交流も少なく集団の中で存在感が薄くなりがちだった。成績は下位。体育が嫌いで4年生のときでもそのために登校を渋ることがあった。

5年生の4月当初、担任(男性)が話しかけても、なかなかしゃべろうとはしなかった。4月中旬、理由は分からないが、登校途中で引き返し自宅へ戻ったことがあった。その日以来、母親がA子を校門まで送ろうとするが、車から降りようとしなかったり、校舎の前で動かなかったりして、学校に入ることを強く拒むようになった。担任は母親と共にA子のわきを抱えて、校舎内に連れて行くが、教室には入れないので保健室で休ませていた。また、仲の良い友達数人が話しに行ったり給食を一緒に食べようと誘ったりしたが、状況は変わらなかった。そこで担任は市の教育相談を母親に勧め、A子、母親、担任の3人で相談に行った。5月になって、父親と一緒に登校し始めたが、いったん教室に入るがすぐ教室を飛び出して帰ろうとするなど、教室へ入ることを拒む姿勢は続いた。担任は母親に調子が良いときは連れてきてもらったり、抵抗が強いときには早退させたりしながらA子の思いに寄り添って動いてもらうように話した。このころ学校全体では、A子の対応に苦慮している担任からの提案で校内研修会が開かれた。そこではA子について情報交換をし、今後の対応としてA子の思いに添って保健室・パソコン室・休養室・職員室・給食室など居場所を変えてみながらA子の様子を見守ること、A子とは主に養護教諭、なかよし学級担任を中心にかかわってみることが確認された。

このような校内態勢の中で5月下旬になると、なかよし学級担任の誘いに応じ、なかよし学級で過ごすことが多くなった。表情が徐々にやわらかくなり学校内で過ごすことへの抵抗が少なくなってきた。そのうちに自分から始業時刻前になかよし学級へ行き始めた。6月からは一日中なかよし学級で過ごし、小鳥の世話や級外の教師の手伝いをし始めた。また担任は学級でこのようなA子の様子を伝えるようにした。するとなかよし学級に行き、A子と一緒に遊んだり給食を食べたりしてかかわろうとする子どもも出てきた。学級で遊ぶ日には、誘うとそばに来て見学するようになった。また、担任や友達の励ましで、田植え、クラブ活動をはじめ、クラスのお楽しみ会や遠足、旅行などもクラスの友達と一緒に活動するようになった。そのような行事や活動の時は声をかけたり手伝いを頼んだりして、A子とかかわろうとする職員の姿も多く見られた。

考 察

幼児期から対人緊張が強かったA子にとって初めての男性担任との出会いは緊張を更に強くし、登校への不安を高めたであろう。そこで新学期間もないA子の登校渋りに対し早い時期に校内研修の場をもち、学校全体がA子について深い関心と情報をもって担任を支えていく態勢がとられた。

このような校内態勢の中で、5月から行きだしたなかよし学級はA子にとって安心できる場であり、対人恐怖を癒し、能力やエネルギーに添った活動ができる場であったと考えられる。また、なかよし学級担任との信頼関係を基に、数人の友達から学級の友達へと人間関係が広がり、A子の行動できる場がなかよし学級から自分の学級へ更に学校全体へと広がっていった。このような教師間の時機を逸しない連携は、A子の活動の広がりを助け、男性担任への緊張緩和に大いに役立ったと言える。

5月からA子・母親・担任は、市の教育相談に通った。他機関との連携を図ることでそれぞれの立場でのA子へのかかわり方について考えることができ、母親の不安を和らげた。

事例4 部活動でのかかわりを通して再登校に向かった事例 A男(中学校1年生)

事例の経過

祖父母、父母、姉、A男、弟、妹の8人家族。家族それぞれが母親に依存する気持ちが強く、特にA男は、家族にとって待望の男児であり、過保護な養育を受け自立心や耐性が十分育っていない。小学校時代は運動が得意で友達とよく遊んでいたが、高学年になり、学習面や身体的なコンプレックスを感じ始めた。「どうせ、僕は・・・」と口走ったり自信なさそうな行動が見られたりして、次第に学校を休みがちになった。唯一好きなスポーツには打ち込んでいた。中学に入り部活動には積極的に参加していたが、学習への意欲は低く数日登校後、次第に登校を渋るようになった。当初担任は、毎朝、家庭を訪問し、登校を強く促したが、A男の拒否が強く、しばらく登校刺激を控えた。家で過ごすようになると、平日はテレビやゲームで過ごし、土、日になると部活動に行くこともあった。また、母親への依頼心が更になり母親と離れずどこにもついて回った。そのうちに土、日の部活動にも行かなくなり、家庭でイライラして家族に当たるようになってきた。

そのころ、学校からの紹介で母親とA男は相談機関に出向いた。相談機関では、運動の話になると表情が和らぐA男には得意な運動を生かしてのプレイセラピー^(注3)で接し、母親には面接を通してA男の理解や家族の在り方への助言が続けられた。A男は、次第にプレイを楽しむようになり、担当者に挑戦する程、意欲が高まっていった。母親も面接を通してA男の理解を深め、活動意欲に添って共に行動するようにした。A男は「担当者に勝つ」という目標を達成すると再び部活動に気持ちを向けていった。そこで相談機関では担任へA男の状態を伝え、運動への意欲が継続できる場づくりについて検討してもらった。

長期の休みになるとA男は担任の誘いにより部活動に行きだし、2学期が始まって部活動登校を続けた。その時間は練習を通して仲間と少しずつ交流できるようになっていった。また、部活動顧問や仲間は試合前には「A男がいなければ試合に出られない」「A男がいてくれて良かった」など励まし続けた。A男が部活動になじんでいく様子を見て、3学期には担任や級友も声をかけたり一緒にプレイしたりしてかかわり始めた。また、担任は常にそばにいる母親に声をかけるようにした。新年度を前にして、A男は自分の意志で教室に向かうことを宣言し、始業式の日に行なった。

考察

小学校時代からの不登校をひきずっている子どもに、本人の特性を生かし活動する場を提供しながら学校と相談機関が連携して対応した事例である。

まず担任が、入学間もなく登校渋りを始めたA男に、登校刺激をしたり刺激を緩和したりしながら常にかかわろうとした。その後もA男の抵抗やエネルギーに添って「相談機関担当者 部活動顧問 担任」とA男と向き合う人的環境と活動の場がつくられていった。A男はこの中で、学習面や身体的なコンプレックスから失いかけていた自尊心を回復し、運動への自信を高めていったと考えられる。担任はA男の気持ちが再び部活動に向かうのを見て、部活動の仲間、学級の友達と人間関係を広げていった。A男は、部活動の中でエネルギーを発散させ、活動を認められることにより自分の存在感を感じだしたと考えられる。さらに、部活動での活動や試合への参加は、自立心や耐性が乏しいA男に自己決定を迫り耐性を育てる場にもなった。

一方母親は、常に行動を共にし、A男の居場所やエネルギー発散の場を探し続けた。母親自身なんとかA男の現状に立ち向かわねばと覚悟を決めつつも、今後の成り行きに不安を抱きA男を見守っていた。その母親にとって部活動中の担任との継続的な会話は、不安を和らげ更に学校への信頼を深めていったと考えられる。また、相談機関での相談は母親にとって子育ての振り返りや家族関係の見直しをする場となり、A男との母子関係改善につながったと考えられる。

(注3) 遊びを媒介にして行われる心理療法

事例5 両親と継続的なかわりをもつことで援助し続けた事例 A子(中学校2年生)

事例の経過

中学校1年生の2学期になってA子は「体育祭に出たくないから行きたくない」ことを理由に休み始めた。母親は体育祭が終わったら登校するようにA子に約束させた。担任は、A子から学校へ行きたくない理由を聞けぬまま「体育祭が終わったら登校すること」をA子に約束させた。体育祭が終わると、A子は約束したとおり登校するようになった。10月中は登校したが、11月に入ると「遠足へ行きたくない」という理由で休み始めた。父親はA子が休み始めてから厳しく登校を促し、母親は「遠足が終わったら、登校するように」とA子と約束させた。担任や学年主任は家庭訪問の際に登校を促していたが、このころからA子は担任とも会うことを拒否し始めたので、登校刺激を止めた。しかし、遠足が終わってもA子は登校しなかった。

その後もA子の欠席が続いたので、担任は学年主任と相談機関にA子への対応について相談しに出向いた。相談機関は、体育祭や遠足への参加は肥満であるA子にとって不安であること、肥満であることから周囲がからかうこと、これらの不安や不信を家族や学校が支えてやれずにいたことなどを指摘した。そして、自信を失い、さらには人間不信になったA子を援助するための対応を検討した。

家庭では父親を中心に登校を促すかわりが続いていたので、担任と学年主任は家庭訪問を繰り返し、A子を援助するにはまず家庭の中でゆっくり休ませることが大切であることを伝え、両親の理解を得ようと試みた。しかし、両親は納得せず、それどころか家庭訪問中にA子は自分の部屋で暴れるようになったので、家庭訪問を週1回にし、短時間で帰ることにした。このころから、A子は一日中自分の部屋に閉じこもることが多くなり、家族ともほとんど会話をしなくなっていった。そこでようやく両親は、A子には登校を促せる状態ではないことや、A子の気持ちに添うことの大事さが理解できるようになった。その後、A子は少しずつ母親に甘え始め、家族にもわがままを言うようになり、昼間は部屋に閉じこもっているが、夜になると母親や兄とドライブに出かけたがった。

そのようなとき偶然にも同じクラスのB子が、自分の悩みを相談するためにA子に電話したことがきっかけで、よく電話するようになった。A子はB子との電話による会話をとても喜んだ。その話を母親から聞いた担任は、B子にA子との電話を続けて欲しいこと、できれば担任にA子の心情を伝えて欲しいことを頼んだ。B子によると、A子は学校の様子がとても気になっていること、友達に遊びに来て欲しいと思っているということだった。そこで担任はB子に、友達を連れて行くことをA子に確認したうえで、良かったら遊びに行つて欲しいと伝えた。そして、B子を中心とした友達がA子宅に遊びに行くようになった。両親もこのころから登校について口にするのを止め、A子を理解し、心情に添うよう努めるようになった。その後しばらくして、A子は担任となら会えるようになった。また、家族のために料理を作るなど家族との関係が良くなったり、自主的に学習したりと、精神的に安定した生活を送るようになった。

考 察

この事例は、体型への劣等感から自信を喪失したり、人間不信になったりして不登校になり、閉じこもってしまったためA子とのかかわりは難しくなってしまったが、担任や学年主任が両親と継続的にかかわることで間接的に援助し続けた事例である。

A子が閉じこもっていても、担任や学年主任は定期的に家庭と連絡を取るなどして関係を保ったことが、家族やA子にとって大きな支えとなった。また、級友からの接触は孤独感を和らげることにもなり、とても大きな安心感をもたらした。このように、A子を理解したうえでの学校の働きかけと、登校することを迫らず、A子の心情に添おうと努めるようになった両親の変容により、A子が安心して過ごせる場の確保ができたことが大きなポイントだと言える。

事例6 担任と親の関係改善で動きが見られるようになった事例 A子(中学校2年生)

事例の経過

A子の聴覚障害を心配して、親は保護的に育てたようである。家族やごく親しい友達とは元気に接しているが、教室では物静かで教師の問いかけにもうなずく程度である。中学1年の2学期後半より欠席が目立ち始め、1～2月は不登校状態であったが、3月になり登校し始めた。

中学2年の4月後半、「かぜ」「微熱」による欠席が増えた。母親が電話連絡をしていたが、次第に連絡が少なくなった。5月の修学旅行の前後数日は登校し、部活動にも参加したが、その後登校しなくなった。家庭訪問の際に、「A子が行きたがらないのを無理にはやりたくない。自然な形で学校に戻れたらいいと考えている。あまり立て続けに来られたらプレッシャーを感じる」と母親から言われた担任は、欠席が続くA子について母親と相談し合う関係をつくれなかった。担任から相談を受けた養護教諭がA子の家に電話をした。そのとき母親は、担任への不信感や家庭でA子が元気に過ごしているので困ったことはないし、担任や学校に相談する気持ちがないということ話をした。姉の不登校の際に、学校の対応に不信感を抱いた母親が、A子の不登校によって更に学校や担任に対して心を閉ざしてしまったようであった。

担任は、A子と会いたいと思い家庭訪問をしたが、母親は取り次がなかった。そこで、担任は、A子と会えなくても母親との関係をつくるのが大事だと考えて、週1回の家庭訪問を続け、A子の様子を聞いたり世間話をしたりするようなかかわりをもった。A子については、母親にA子への小さい手紙を渡してもらうよう頼んだ。A子の様子を語る母親は、「元気にしてます」とだけ言って素っ気ない態度が多かったが、A子がピアノが弾けることや習字も上手なことなどを話すときは母親の表情が和らいだ。一方担任は、学校で折に触れ職員にA子親子の様子を知らせたり、スクールカウンセラーに相談したりした。

9月になり担任が家庭訪問をした際、偶然A子が顔を見せた。A子はその場を立ち去ることなく、担任の話をうなずく感じで聞いた。その後またA子と会えない家庭訪問が続いた。11月、今までは家にいても担任が訪問をするといつの間にかいなくなる感じの父親があいさつをするようになった。さらに12月初め、1回だけではあるが母親がA子を呼んで担任に会うように勧めた。

1月A子は担任へ年賀状を出した。父親が初めて自分から担任に話しかけてきた。また、A子は冬休みに学校から渡った手本を基に習字の練習をしていた。母親を通じて校内席書会に作品を出し入選した。このころより担任はA子と会える回数が増えた。また、4月の家庭訪問以来、初めて部屋に上がらないかと母親から勧められた。母親がA子にピアノを弾いて担任に聴かせるように勧め、A子は少しためらっていたが弾いた。担任とA子との会話そのものは非常に少ないが、A子の特技や趣味を中心としたやりとりができた。母親も今までになく穏やかな表情で、自分の父親やA子の幼いころの話をした。3月になり、担任は母親から雛人形を見るように誘われた。そのとき、母親からの促しでA子は担任のためにピアノを弾いたり、絵を持って来て見せたり、これまでよりはA子の声が多く聞かれた。

考察

姉の不登校の経験で学校への不信感をもっていた母親が、A子の不登校によって学校や担任への不信が更に強まり、担任と保護者との連携が取れず、子どもへの援助が難しかった事例である。

担任は、何とかA子親子にかかわろうとするが、それを拒否する母親に、家庭訪問を続けるしか手だてを取れなかった。担任は、スクールカウンセラーの助言を得ながら、A子を直接的に援助することは難しいとしても、母親との信頼関係ができれば、A子とのかかわりももてる時が必ず来ると考えた。短時間ではあったが、担任が家庭訪問を通して、A子親子の気持ちを受け止める姿勢で継続的なかかわりをもったことで、担任に対する警戒心が弱まり、頑なだった母親の変容につながったと思われる。また、母親の保護の中にいたA子が、母親と担任の関係が改善していく中で、少しずつではあるが担任に対しても安心感を持ち、会ったりピアノを弾いて聴かせたりするようになったと考えられる。

事例7 スクールカウンセラーとの連携による援助の事例 A男(中学校3年生)

事例の経過

父親(会社員)母親(主婦)姉(高2)A男の4人家族。A男は成績優秀で何事にも真剣に取り組む生徒であったが、父親の仕事は転勤が多く、そのためA男の意志に反して転校をせざるを得ず、親しい友達がなかなかできなかった。また、父親は仕事で帰りも遅く、成績のことで口出しはするが子どもにかかわることはほとんどなかった。母親は子どもをしっかりと育てようと一人で頑張ってきた感じがする。

本校には中学2年生の3学期に転校してきた。3年生になり、5月の連休から不登校になった。A男は勉強に対してやる気が起きないと言うようになり、家の中でゲームをしたりマンガを見たりして過ごすようになった。そこで、担任は、スクールカウンセラーへ相談を依頼し、母親へのカウンセリングが始まった。A男は学校には行きたくないと拒否したので、A男に対しては担任が家庭訪問を通してかかわることにした。

面接は学校の相談室で母親の都合を聞きながら10日から2週間おきに続けられた。初回面接で母親から「A男は少しずつではあるが、将来に対する不安や友達がいない寂しさ等を母親に話をするようになった」などの話が出た。

そこで、スクールカウンセラーの助言の下、担任はA男の興味ある話(ゲーム、マンガ)に寄り添って信頼関係を築いていくこと、A男に常に関心をもち続けていることを何らかの形(いろいろな情報を伝える、誘うなど)で示していくこと、ただし、あくまでA男に合わせて行うことなどを確認した。

6月下旬、どのような高校があるのか、高校へ進学できるのかというA男の不安が出てきた。また、母親からは「スクールカウンセラーの助言どおり、親として焦らないことを守っているが苦しい」という言葉が出てきた。そこで、A男と母親への援助をどうするかを検討し、A男に対しては夏休みの高校体験入学への参加を目標に取り組むことを、母親に対しては面接回数を増やすことを提案し、スクールカウンセラーによる週1回の面接を実施した。

A男はコンピュータ技師になりたいと考えるようになり、担任は工業高校と普通高校の体験入学を勧めた。A男は次第に高校へ進学したいという思いが高まってきたが、同時に実際問題として入学できる学力が身に付くかという不安も強まってきた。そこで、担任は、宿題を出すことにA男が納得したので、プリント学習を通してのかかわりを続けた。

このようなかかわりが効を奏したのか、8月の体験入学にA男は緊張しながらも参加することができた。これをきっかけに9月からは時々休みはするが特別教室への登校を開始した。

考察

この事例は、成績は優秀であるが更なる飛躍を両親から常に求められるため、今の自分を肯定できず、支える家族も友達も見当たらないため不安を一人で抱え込み、次第にやる気を失い不登校になった事例である。スクールカウンセラーからの適切な助言(「A男を十分休ませるために家庭に安らぎの場をつくること。そのためには母親を支えること」「A男に安らぎのある場が提供できれば自分で回復しようとする。そのときに適切なかかわりを必要とするので教師の援助が大切になってくる」)を基に、担任がA男との信頼関係を築くために興味のある話に寄り添い、A男のペースに添って進学意欲を高める取組を続けた。また、スクールカウンセラーによる母親への援助で、母親が子育ての不安を和らげ、家庭でA男を支えられるようになり、A男は今の自分を見つめ、認め、次第に自分の可能性に向かって再登校を始めたと言える。

このようにスクールカウンセラーの適切な助言を実践していくためには、常日ごろからスクールカウンセラーとの関係を深め、お互いの立場を理解し合い、スクールカウンセラーがやれること、教師として何がやれるか、どのような手だてを取ることがより有効かなどを確認しておくことが大切になってくる。この事例でも、スクールカウンセラーの助言を実践できたことで有効な対応ができたと言える。

事例 8 適応教室を活用した事例 A 男（中学校 3 年生）

事例の経過

A 男は成績優秀。中学 2 年生の 1 月に、家で「疲れた」ともらし始め、朝起きられないようになり、休みがちになった。しばらくして、クラスや部活動でいじめられていたことが分かった。その後、いじめは学校全体での対応で解決したようであったが、全く登校しなくなった。不登校になって、担任が家庭訪問しても会おうとしないときもあったが、友人とゲームソフトを貸し借りしたり、母親と外出したりしていた。そこで学校は、適応教室を勧めたところ、A 男は興味を示し、母親と見学に行った。しかし、精神的な負担を感じたのか、短時間見学するのが精一杯だった。

A 男は「学校でのことは話したくないし、学校に行く気もない。適応教室には行きたい」など、母親は「父親は A 男が登校しないのでつらく当たり、父親がいるときは家庭の雰囲気張りつめる。自分は A 男に何も言わないが学校に行って欲しいと強く思う」などと語った。これらのことから学校と適応教室は、A 男が家でも学校でも心の傷を癒す場がなかったと考えて、A 男と母親への援助について検討した。

4 月中旬、A 男は母親と外出したついでに、適応教室の前まで行くようになった。そして、体験ということで適応教室に週 2 回ほど通うようになった。しかし、ごく短時間で帰ったり、集団に入るのを嫌がり一人で活動したりした。それでも適応教室のスタッフは、A 男のペースを尊重したかわりを続けた。その後、通級回数が増えるとともに、A 男の活動時間が長くなり、集団活動にも参加するようになった。毎日のように通うようになると、出席日数へのこだわりや学習に向けた意欲を語るようになった。夏休みには適応教室の宿泊学習にも参加した。また、以前仲の良かった同学年の B 男とのつき合いが戻り、夏休みに 2 人で数泊の旅行をした。

学校も A 男の意思を確認しながらかわり、訪問日の決定などを A 男に任せるようにした。すると、短時間だが担任と会うようになり、その後自分から授業の進度を聞くまでになった。担任は、夏休みに家庭訪問した際に、A 男の心的エネルギーが以前より高くなったと感じた。しかし、登校を促すには時期尚早だと思い、進路や受験の情報を与えるにとどめた。この担任の話で A 男の気持ちは大きく学校に向き、B 男が誘ったことで、2 学期の始業式の午後に母親と登校した。このときに担任が個別学習を勧め、話合いの結果、A 男は週に 1 回午後 1 時間ほど登校することにした。その後、登校する回数が少しずつ増え、2 学期末テストは朝から受けた日もあった。

母親は、担任をはじめとする学校の職員や適応教室のスタッフとの話及び A 男の変容から、登校することを強く願うより、A 男の気持ちに添うことが大事だと思うようになった。A 男もこのような母親の変容を精神的な支えと感じたのか、父親にきついことを言われても無視するようになった。その後、父親も A 男や母親の変容を感じたからか、A 男の気持ちに添おうとするようになった。そして、A 男は「傷が癒えた感じ、完全じゃないけど」と語り、登校回数が増えるにつれ、適応教室に通う回数が減っていった。

考 察

いじめをきっかけに不登校になり、心の傷を癒す場が広がるとともに登校し始めた事例である。

学校と適応教室は「癒しの場として家庭を基盤とし、人間関係の幅を広げること」や「学校との信頼関係を回復させること」などを援助するうえでの方針とした。

適応教室のスタッフは A 男を集団の一員として受け入れて、心の傷が癒え、対人関係が広がるのを見守った。学校も担任を中心として、A 男の状態に応じたかわりを継続し、信頼回復に努めた。このような対応で、A 男は心の傷を癒す場と、人間関係の幅を広げ、学校への信頼を回復し始めた。母親が A 男の不登校を認め、A 男の気持ちに添おうと努めたことで、A 男の自己肯定感が高まったことと、A 男が適応教室に行ったことで人間関係が広がったことは、特に意味があると考えられる。また、友人の存在も登校につながる大きな要因であったと考える。

事例9 担任とクラスメートのかかわりで再登校につながった事例 A子(高等学校1年生)

事例の経過

A子にとって、この高校はA子が希望した学校であり、勉強に力を注ぎいきいきとした高校生活を送っていた。また、クラスの中でも最も成績が良く活発なグループに入っていた。1学期は無欠席のA子が、2学期になって数日後に欠席をした。A子の状態を知るために担任が、家庭に電話をすると高熱が理由での欠席であった。それから、3日後の朝、母親から担任へ電話があり「友人関係の悩みで学校へ行くのがつらいとA子は訴えている」ということであった。その日のうちに担任が家庭を訪問し、母親とA子からの話を聞いた。A子は、表情が暗く口数も少なく、大変落ち込んだ様子だった。そこでのA子の話は主に次のようなことであった。『1学期の学校祭の数日前からB子との関係が気まづくなってきた。B子を傷つけるような言動があったと指摘されたが、A子は幾ら考えても分からなかった。その後電話で何回も謝ろうとしたが、電話に出てくれなかった。同じグループの友達に相談したが冷たい態度で、親身になってくれなかった。こういう状態でも何とか登校していた。2学期が始まり数日登校した後、A子はB子を待って一緒に帰ろうとしたが、B子は怒っている様子でその態度は大変冷たかった。このことで、A子は更に気持ちが沈み込み、学校へ行かなければと思いつつも登校できないようになった。頭が痛くなるようなこともあった』。

そこで、翌日担任は、A子が話してくれたクラスの生徒から事情を聞くとともに、A子の気持ちも伝え、担任としての思いを話した。生徒からの話では、A子がグループの生徒に傷つくようなことを何度も言っているにもかかわらず、A子自身にその意識がなかった。そのため、グループの一人がA子にそのことを指摘したが、A子は取り合わなかった。そのことがあって、A子が仲間はずしになったということである。その日の放課後には担任と2人の生徒でA子宅を訪問し、A子が元気になるように話しかけた。また、週末には、クラスの他の生徒が電話をしてくれるなどの動きもあったが、欠席は続いた。

担任は家庭訪問を継続し、家庭ではA子がリラックスできるような雰囲気をつくることや小さな変化も担任に連絡してもらうように協力を求めた。また、相談機関での相談を勧めたところ、母親とA子が相談に行った。このことで、母親の不安も軽くなり、A子の気持ちも少しずつ楽になった。クラスに対しては全員にA子の気持ちを伝え、いじめについて考えを深める機会をつくったところ、クラスの生徒全員がA子への励ましの手紙を書いた。さらに、担任は「全員で進級するにはどうしたら良いか」という立場でクラスへの働きかけを続けた。また、グループの生徒に対しても傷ついたA子の気持ちを考えさせた。次第にクラスの生徒たちの中にA子のことを気にかける雰囲気が増し、A子を受け入れる態勢ができてきた。クラスの生徒たちが、A子の行事などへの参加を心待ちにし、A子に対して様々な方法で呼びかけるようになってきた。B子もA子のことを心配し、A子の登校を待つようになった。このことがA子にも伝わり、心が和み再登校への力がわいてきた。A子と他の女子生徒2人が一緒になり、3人での登校が始まった。授業中も他の生徒たちが見守る雰囲気があり、A子にとって大きな支えになったと思われる。その後、A子は一人で登校を始めた。

考 察

周りの生徒からの仲間はずしにより友達不信になり不登校になったけれども、担任を中心としたクラスの受け入れ態勢づくりや友達の励ましと相談機関での援助を通して再登校につながった事例である。担任がクラスの中にA子を支える雰囲気をつくるという一貫した姿勢で指導を続けたことがクラスの生徒の信頼関係を強いものにし、A子への働きかけにつながった。その雰囲気の変化がA子の安心感を強めたと思われる。また、A子のことをクラス全体の問題としてとらえたこと、電話のあった直後に家庭訪問を行うなどタイミングを逃さない適切な対応がなされたこと、さらに、相談機関との連携を図ったことなどがA子の友人への不信感を和らげ、クラス全体の間人関係の改善につながったと考えられる。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 有効な対応のために

ア 信頼関係の回復

事例が示すように不登校の要因として、子ども自身がもっている課題、また子どもを取り巻く環境がもっている課題がある。例えば、「対人関係がうまく取れない」「劣等感を抱いている」「自分を肯定的に見れない」「対人恐怖がある」など、他者とのコミュニケーションが促進されにくいことであったり、「いじめを受けた」「教師になじめない」「転校した」など、環境の変化や偶然性であったりする。また、これらの要因が複雑に絡み合って不登校になることもある。事例から、このような要因で不登校になった子どもたちは「人への不信感」を強く抱いていると感じられた。ここに示すすべての事例において、この「人への不信感」は対応する際に困難を生み出しており、「信頼の回復」のために多くの配慮がなされている。しかし、いったん「信頼の回復」が得られたときの変容は急激であり、有効な対応のために「信頼の回復」がいかに重要であるかを改めて実感させられた。

イ 対人関係の広がり

「不登校の子どもにとっての援助とは何か」と考えたとき、子どもが抱えている要因から、援助の在り方も個々に合わせて変わってくる。事例から分かった具体的な援助とは、保健室、特別教室、家庭、相談機関などの「場の提供」を行い、その場を生かして、養護教諭、担任、友達、保護者、相談機関担当者など様々な人とのかかわりを通して「対人関係の広がり」を進めたことだと言える。このように家庭や学校あるいはそれを取り巻く社会が、不登校の子どもに対し、その子どもに合った場の提供と、その場を生かした人間関係の広がりを模索していくことが、不登校の子どもたちへの援助と言えると思われる。

ウ 援助の工夫

援助者が不登校児童生徒とかかわっていくとき、不登校児童生徒の状態を十分に把握し、それを適切な対応につなげていくことが重要である。事例に見られるように「部活動を通して」「母親の不安に添って」「母親と離れられない状態を受け入れて」「能力を生かして」「興味を通して」など、子どものペースに合わせたかかわりを続けていくことが不登校状態の改善につながっている。このように不登校児童生徒に対し様々なかかわり方を工夫することが大切な援助のポイントとなる。さらに、事例からも分かるように、有効に機能させ、積極的に活用していくことが求められる多くの援助体制がある。

スクールカウンセラー・相談機関との連携

不登校児童生徒の状態や学校・地域の実状に合わせ、適切な連携を取ることで、有効な援助が期待できる。

教育相談係・養護教諭の適切な対応

校内における教育相談の核として、教育相談係・養護教諭への期待は大きくなっている。不登校児童生徒個々への対応の在り方とともに、学校や専門家・相談機関との効果的な連携、活用の推進が望まれる。

校内研究会の充実

すべての教師が不登校に対する理解を図り、必要な知識及び技術を身に付けるとともに、常日ごろから児童生徒とのふれあいのあるかかわりをもち続けることが必要になってくる。そのための校内研究会の充実が重要である。

校内体制の確立

不登校児童生徒を援助していくために、様々な場の提供と援助の工夫が重要である。したがって、たくさんの援助の手と見守る目、豊かな発想を基にした援助方法の工夫が必要になってくる。これらの実践のために、校内の人的・物的な援助を有効に活用するシステムづくりがこれまで以上に学

校に求められるようになる。

(2) 今後の課題

今回の調査研究では、多様化する不登校に対し有効な指導・援助の在り方を探ることを目標に取り組んだ。そのため、変容が見られた事例を対象にしたが、長期化してなかなか改善が見られないケースも多い。今後そのような事例についても分析を試みることにより、より幅の広い対応の在り方を求めていく必要がある。

研究委員

平山 峰幸	佐賀県教育センター指導相談係長	平成10～11年度
水田隆由紀	佐賀県教育センター研究員	平成10～11年度（平成10年度佐賀県教育センター研修員）
市丸 広次	佐賀県教育センター研修員	平成10～11年度
古賀 一菊	佐賀県教育センター研修員	平成10～11年度
吉浦みどり	佐賀県教育センター研修員	平成11年度
原口 元茂	佐賀県教育センター研修員	平成11年度
畠山 壽彦	伊万里市立伊万里中学校教諭	平成10～11年度
日山 亮一	鳥栖市立鳥栖中学校教諭	平成10～11年度
馬場 弘子	鹿島市立明倫小学校養護教諭	平成11年度
吉田 正	唐津市立鏡山小学校教諭	平成11年度
江崎 邦弘	佐賀県教育センター研究員	平成10年度
本山 弘満	佐賀県教育センター研修員	平成10年度
小山 正己	佐賀県立大和養護学校教諭	平成10年度
田中 安子	鹿島市立浜小学校教諭	平成10年度

引用文献

- (1) 文部省 「我が国の文教政策」p256 平成11年度

参考文献

- ・ 東京都多摩教育研究所 『不登校児例の再検討』 1992年
- ・ 品川不二郎 『田研式 親子関係診断テストの手引き』 1958年 日本文化科学社
- ・ 相馬 誠一 『「葛藤の少ない不登校」の状態像と対応』 1996年 ほんの森出版
- ・ 佐賀県教育センター 『子どもを生かす教育相談』 1985年 第一法規
- ・ 國分 康孝 『カウンセリング辞典』 1997年 誠信書房